特集 里山のある暮らし

日々の通勤や通学、買い物や散歩の途中で、ふと目にする近くの山。春の鮮やかな新緑は、日を追うごとに色濃くなり、やがて赤や黄色に色づき葉を落とす。そんな変化を見ることで、季節の移ろいを感じさせてくれる山。それが「里山」です。

昔から里山は私たちにとって身近な存在でしたが、里山が果たす役割は、昔と現在とで大きく変化してきています。しかし、変わらないのは、里山と人はその関わりの中で共生しているということ。

今、改めて里山と私たちとの関わりについて考えます。

昔の里山の姿

昭和30年代後半、日々の暮らしに使っていた燃料が薪や炭から、石油やガスなどの化石燃料に急激に置き換わる「燃料革命」が起こりました。それまで人々は、ご飯を炊いたりお風呂を沸かすために、里山から燃料となる薪や柴を採ったり、堆肥を作るために落ち葉を集めたりするなど、森林の恵みを存分に活用していました。

「燃料として木を伐(き)り続ければ、里山から木がなくなるのでは?」そんな疑問が浮かぶかもしれません。しかし、薪などに利用されていたドングリの木の仲間などは、秋から冬に根元から伐採しても何度も芽吹く性質を持っています。これを萌芽(ほうが)と言います。

人々は、この萌芽の性質を利用して持続的に燃料などの資源を得ることができるよう、適切に里山を管理してきました。その結果、里山には樹齢の若い元気な木々が多く、四季折々のさまざまな植物や生き物が生息し、その豊かな環境の中で、子どもたちは自然を感じ存分に楽しむ「原体験」を積み重ねてきました。

萌芽の様子

現在の里山の姿

ところが、燃料革命によって里山の木を伐り利用する必要がなくなり、人の手が入らなくなると、木々はどんどん成長し、それに伴って里山の植物の種類も変化していきました。子どもたちが走り回り、時には集落の人が林の中にお弁当を持ち寄って親しんだ里山は、人を寄せ付けないうっそうとした森へとその姿を変えていき、そこにすむ生き物や植物も移り変わりました。このような植生の移り変わりを、植生遷移(しょくせいせんい)と言います。

里山を守るために

四季折々の景観が見られ、多様な生物が存在する里山を守り残したいと考えると、茂った木を定期的に伐り続けなければいけません。

今、私たちは何のために里山の手入れをするのでしょうか。

カーボンニュートラルが叫ばれる今日、地球環境を守ることはもちろん、山を美しくするためや多様な動植物がすめるようにするため、人々が山に入って自然を楽しめるようにするためなど市内では、市民の皆さんがさまざまな思いや立場で自ら団体を立ち上げ里山を保全しています。

本市では、「にぎわい里山づくり条例」に基づいて、これまで29団体の活動を支援してきました。市民によってこれほど多くの里山保全活動が行われていることは、本市の誇るべき特徴です。

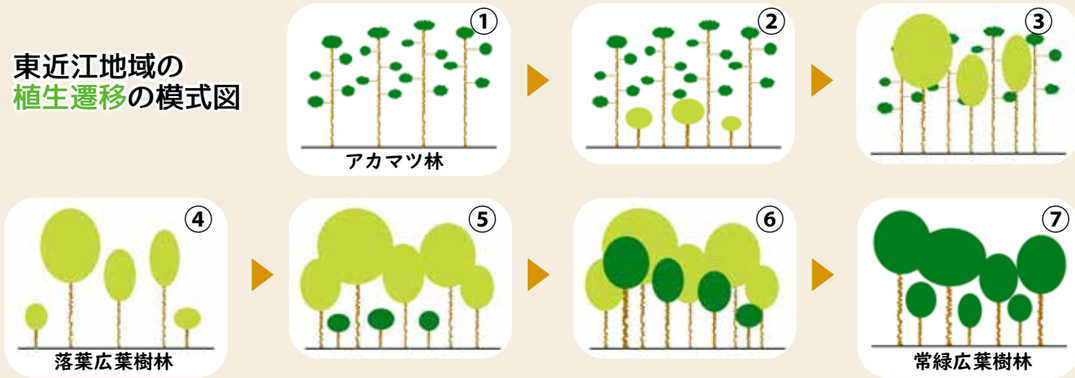
POINT 植生遷移とは

かつて多くの里山には、アカマツが生えていました(①)が、人の利用が少なくなると、ドングリの木や桜など冬に葉を落とす落葉広葉樹が生え(②)、アカマツは衰退します(③)。落葉広葉樹の森林は多様な生物が存在し、新緑や紅葉なども楽しめます(④)。しかし、さらに人の手が入らなくなると、シイやカシなど冬でも葉をつけ、暗さに強い常緑広葉樹が茂っていき(⑤)、落葉広葉樹が少なくなっていきます(⑥⑦)。

このように植生が移り変わって行くことを植生遷移と言います。模式図で示すと下図のようになり、本市の多くの里山は、今⑥と⑦の間の段階です。

里山を守るとは、植生遷移をどの段階で止めるかを考え、実行することです。里山としてさまざまな段階の森があってもよいのですが、地域で里山の保全活動をする場合には、④の段階を目標としています。

東近江地域の植生遷移の模式図



INTERVIEW 里山を守る人々

きぬがさ山　里山に親しむ会では、平成14年から繖山(きぬがさやま)の保全活動に取り組んでいます。今年からは、里山保育を通じてたくさんの子どもたちが山を訪れています。子どもは自然にすぐ親しんでくれます。木陰が涼しかったり、風を感じたりして五感で自然に包み込まれる感覚は、人間の感性を育て、癒してくれます。気軽に自然の中に入ることができて、歴史的な遺跡もある繖山を安全に散策してもらえるように整備も進めています。一緒に里山を楽しみましょう。

会員募集中!
一緒に里山保全に
取り組みましょう。

きぬがさ山　里山に親しむ会
射庭　康則 代表

多くの人に里山へ関心を向けてもらうために

里山は、人の関わりがあってこそ輝きが増します。里山の価値や魅力を伝えるために、市としての里山活用事例を紹介します。

令和５年
４月オープン

布引の森

東近江市と日野町の境界にある広さ9.7ヘクタールの布引の森には、コナラなどの落葉広葉樹が分布し、当地域の代表的な里山の風景が見られます。起伏のある森の中には、小回り（約0.9キロメートル）と大回り（約1.2キロメートル）の遊歩道が設けられています。子どもから大人まで幅広い年代に里山の自然に親しんでもらうとともに、山歩きへの関心を高める入口としても活用してください。

園内マップ

拠点施設となる「ネイチャーセンター」には、自然に関する図書コーナーや講義を受けられるレクチャールームがあります。

TIPS

２つの森　何が違うの？

布引の森は丘陵地
河辺いきものの森は愛知川沿い河辺林

布引の森は、古琵琶湖層（180万年前）が隆起した地形で、布引丘陵の中ほどに位置します。また、アカマツからの植生遷移が進む過程を見ることができます。

河辺いきものの森は愛知川沿いに位置し、地層が砂利層であることや、洪水時に鈴鹿の山々に生育する植物の種子が流れ着きキクザキイチゲなど山の植物が自生するなど、河川との関連が深い森です。

布引の森は起伏に富む山林、河辺いきものの森は平地

布引の森は、起伏のある山林で尾根や谷によって異なる植生が見られ、アップダウンの連続する遊歩道は、里山歩きを楽しみたい人やこれから山歩きを始めたい人にぴったりです。

河辺いきものの森は、川に沿って広がる平地林で、小さなお子さんにも歩きやすい遊歩道がめぐらされ、一部は車いすやベビーカーでも気軽に森を楽しむことができます。

河辺いきものの森

愛知川に沿って分布する河辺林を利用した15ヘクタールの森です。平坦な森の中には、気軽に散策できる観察路、カワセミが飛ぶ水辺、拠点となるネイチャーセンター、地上12メートルの木々の間を歩く林冠トレイルなどがあります。また、里山に親しむさまざまなイベントを開催しています。

▲林冠トレイルを楽しむ人々

里山保育

園児・幼児などを対象に、身近な自然の楽しさを体験することを通じて里山など地域の自然が持つ価値を認識し、地域への愛着心を育むことを目的に、こども園など15園（令和５年度）で実施しています。

エコツアー

地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を来訪者に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指して開催しているツアーです。里山をはじめ、さまざまな自然を舞台に実施しています。

SEA TO SUMMIT

人力のみで湖（カヤック）から里（自転車）、そして山頂（登山）へと進む中で、自然の循環に思いを巡らせ、かけがえのない自然について考えようという環境スポーツイベントです。今年度は登山コースを繖山・猪子山で開催しました。

INTERVIEW

全国各地の
SEA TO SUMMIT
に参加している
佐々木 司さん

普段は布引の森で皆さんを案内しています。

今年のびわ湖　東近江　SEA TO SUMMIT は、初めて里山を舞台として開催され、ゴールである猪子山の山頂からは伊庭内湖や琵琶湖をはじめ市内のまちなみ、そして鈴鹿山脈までを見渡せて感慨深かったです。

東近江市は、1つの市の中でも異なる自然をたくさん見ることができるところが魅力的です。市内には、すぐに自然に触れ合える環境や施設もあります。皆さんぜひ、里山を積極的に利用してみてください。

里山の保全に取り組む団体が市内に29団体もあるということは、地域の自然に対する皆さんの強い思いの表れであると思います。里山の自然は、人の手が加わってこそいきいきします。河辺いきものの森や布引の森はその好事例で、環境学習の場として存分に活用しています。

本市には、市民の皆さんの主体的な活動に加え、里山をいかした施設や里山保育の実施、エコツアーによる機会の提供など、さまざまな形で里山に関わることのできる環境があり、これを引き継いでいくことが私たちの責務です。

今後は、生物多様性の向上やカーボンニュートラル社会の実現においても、里山は重要な役割を果たすことが期待されます。

森と水政策担当管理監・里山活用推進室長
河辺いきものの森・布引の森所長
丸橋　裕一

豊かな里山を未来へ

身近すぎて大切さに気付かない、あることが当たり前となっている里山。しかし、里山は今、植生遷移の進行により、人の立ち入りを拒むほどうっそうとした森になりつつあります。

季節の移ろいに応じて豊かな表情を見せてくれる里山。多様な生き物がすむ里山。子どもたちが走り回る里山。このまま何もしなければ、そんな姿は消滅してしまうかもしれません。

本市には、多くの里山を保全する活動団体があり、里山を知るための施設や機会もたくさんあります。豊かな里山の姿を未来に引き継ぎ、その恵みと共にある暮らしを目指して、まずは、身近な里山に目を向けてみませんか。

問 森と水政策課
〒050-5802-9021
FAX 0748-24-5692